サンデー経済

戦時中一時学生寮に

にいがたの老舗 100年の系譜

宴に時代映す　長養館（上越市）③

太平洋戦争の激化に伴い、米や砂糖、酒も配給制が敷かれると、高田市（現上越市）の料亭長養館は食材の調達に悩まされた。吉原耕一社長(55)は「うちには『吉原』以外の名字の印鑑が多数残っている。店に出す米をなんとか集めようと、協力いただける方に名前を借りて配給時に使ったためだそうです」と、当時の苦労を思いやる。

だが料理店の営業自体に統制が及んだことで、長養館の努力は断たれる。1943（昭和18）年、料亭の看板を一時下ろし、学徒動員で日本ステンレス直江津工場（現新日鉄住金直江津製造所）に通う生徒の寮となった。

上越市史によると、同工場は魚雷用の金物など軍事産業へ転換。「寮になるのは、軍需を支えることだと得意先から説得されたのでは」と恵一郎（えいいちろう）会長(82)。会長の父で当時当主だった和一郎が「店が傷まないだろうか」と心配していた姿を覚えているという。44年には和一郎が召集され、妻イツが生徒たちの世話に当たった。

終戦の45年に和一郎は帰郷したが、厳しい時代は続く。主な客だった軍人は消え、地主は農地改革で財産を失った。「上得意がパーになった」（恵一郎会長）。

高田の風景と調和するように、雁木（がんぎ）を模した入り口で客を迎える長養館＝3月

再出発を図り営業強化

会長の妻で先代おかみの末子さん(82)は「ベッド大の長持を2棹（さお）片付けたことがあったが、開けたら畳紙（たとうがみ）ばかり。この時期に、中に入っていた着物や美術品を売ってしのいだのでしょうね」と語る。

長養館は47年、旅館業免許を取り、宿泊できる料亭として再出発する。まだ少ない宴席だけに頼らず、経営を安定させる策だった。

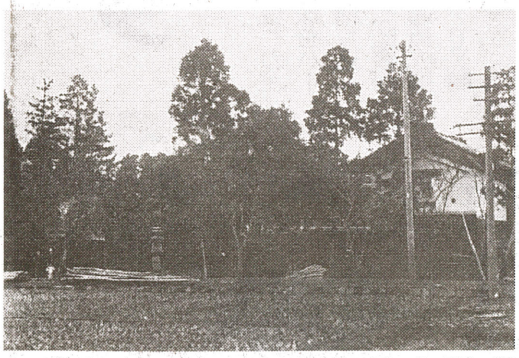
営業も強化した。和一郎は56年、東京の大学を卒業して都銀で働いていた恵一郎会長を呼び戻した。「本当は弟が跡を継ぎ、自分は勤めを続けるつもりだった」と恵一郎会長は振り返るが、銀行員の経験は長養館を助けた。

「銀行で担当したのはお得意さま回り。長養館に戻ってからも、だれと会えば上の人まで話が届くのか、外回りの勘が働いた」と恵一郎会長。高田市にあった県の出先機関、上越支庁に日参した。当時は、同市に新潟市の本庁から出張に来れば1泊するのが通例。恵一郎会長となじみになった支庁幹部は、夜には出張してきた本庁職員を連れ、長養館に顔を出した。

代々の知事もよく宿泊した。当時のおかみの末子さんは、午前零時の門限に遅れた知事を閉め出したことがある。「深夜に人が廊下を行き来すれば、ほかのお客さまに迷惑になる。おわびはしたが、『どのお客さまも等しく大切、決まりは決まり』ともお話ししました」と末子さん。この一件の後も、県関係者は長養館を愛用したという。

復興で活況となっていた建設業者、農協の役員になった高田郊外の元地主なども新たなひいき筋に加わった。日本の高度経済成長とともに、長養館は宴のにぎわいを取り戻した。

各地の料亭が宴会場を新設し、宴会場の広さが店の良しあしを決めるとする風潮もあった。だが、恵一郎会長は店の規模を変えなかった。「屏風（びょうぶ）と店は広げれば倒れる」。戦中戦後の苦しい時代を体験した父和一郎の言葉を守ったためだが、この決断が「趣ある木造建築」という財産を長養館に残すこととなる。



大正末期の長養館遠景。蔵は今も面影をとどめるが、周囲の畑は店や住宅へと姿を変えた＝1924年、上越市寺町2